

# 茶の湯文化学会会報 No.78

第78号 / 2013年10月8日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 茶の湯文化学会平成二十五年総会・大会報告

茶の湯文化学会平成二十五年総会・大会は、平成

二十五年六月九日(日曜日)午前十時から、金沢市香林坊一丁目の石川県教育会館を会場に、全国各地から参加した役員・会員とその同伴者に加え、開催地金沢・富山・福井の北陸三県からの一般参加者も交え二百名を超える参加者を得て開催されました。午前十時から正午過ぎまで四人の発表者による研究発表が行われ、昼食をはさんで午後は、平成二十五年総会が開催されました。今年茶の湯文化学会創立二十周年にあたっており、総会の後「雑談(ぞうだん)・茶の湯文化学会創立二十周年」と題して、茶の湯文化学会の初代会長中村昌生、二代目倉澤洋行、三代目会長谷晃の三氏による鼎談が行われました。

大会・総会に先立って六月八日(土曜日)には、茶の湯文化学会創立二十周年記念茶会が、金沢市本多町三丁目にある金沢市立中村記念美術館内の茶室「耕雲庵」及び旧中村邸で早朝から催され、同日の夕刻からは懇親会が金沢市香林坊二丁目の金沢エクセルホテル東急で開催されました。総会・大会の開催会場となった金沢市香林坊・本多町界隈は、金沢市の文教施設が散在する地域で、兼六園や金沢城、本多の森と呼ばれる旧

藩家老本多氏の屋敷跡などの豊かな緑に囲まれた地域です。両日とも梅雨を忘れさせる好天に恵まれ、参加者は爽やかな日差しの中で艶やかな緑を楽しみました。

### I 研究発表

- 一、沢村信一氏(株式会社伊藤園中央研究所)  
「中世から近世にかけての茶栽培の変遷 復元気温から新茶摘採時期の推測」
- 二、深谷信子氏(早稲田大学エクステンションセンター) ター講師  
「小堀一族と前田家」
- 三、北春千代氏(石川県立歴史博物館学芸主幹)  
「仙叟と交遊の人々」
- 四、藪下宏氏(金沢市立中村記念美術館館長)  
(斎藤直子 金沢市立中村記念美術館学芸員代読)  
「魚住為楽の生涯とその銘品」  
(三代魚住為楽・人間国宝の出演銅鑼)

### II 総会

茶の湯文化学会平成二十五年総会は研究発表に続き午後一時から石川県教育会館で行われました。影山純夫理事の総合司会によって始まり、神谷昇司理事を議長に選出して議案審議が行われ、原案通り可決、承

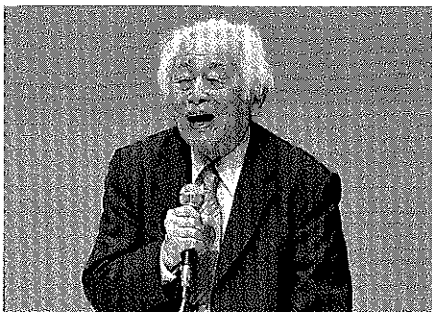
認められました。

議案

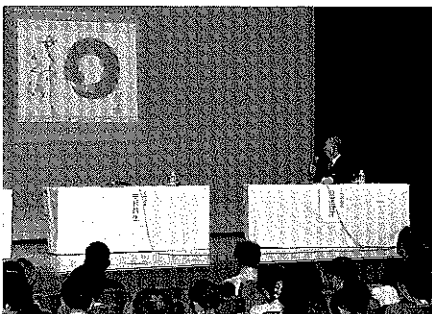
- 一、平成二十四年度事業報告
- 二、平成二十四年度決算報告及び監査報告
- 三、平成二十五年度事業案
- 四、平成二十五年度予算案
- 五、役員改選

Ⅲ 雑談(ぞうだん/ぞうたん)

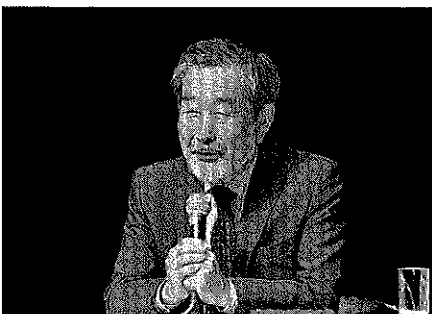
茶の湯文化学会創立二十周年を記念して開催された「雑談(ぞうだん)・茶の湯文化学会創立二十周年」では、初代会長中村昌生氏、二代目会長倉澤行洋氏、三代目会長谷晃氏の歴代会長に、順次それぞれに茶の湯文化研究について語って頂きました。



中村昌生 初代会長



倉澤行洋 2代会長



谷晃 3代会長

Ⅳ 記念茶会と懇親会

大会・総会の前日、平成二十五年六月八日早朝から、茶の湯文化学会創立二十周年記念茶会が開催されました。金沢市立中村記念美術館の全面的な協力を得て、美術館が収蔵する玉舟宗瑠筆「竹密不妨流水過」を本席の掛物とするなど収蔵品による道具組がなされ、喫客はもてなしを受けました。合わせて設えられた展覧席では、中村記念美術館の収蔵品から茶道具の名品が特別展覧されました。

懇親会は大会前日の夕刻から、大会・総会の会場となった石川県教育会館に近い金沢市香林坊の金沢エクセルホテル東急で行われ、加賀宝生流能楽師・藪俊彦師と仲谷浩子師に



記念茶会

よる歓迎の謡曲・仕舞いと笛による「安宅」が演じられました。

Ⅴ 記念出版

熊倉功夫新会長は新任挨拶のなかで、今大会の記念出版・講座「日本茶の湯全史」について触れ、従来の出版に欠落していた近代史を加えて通史となったことによって、現代の



熊倉功夫新会長

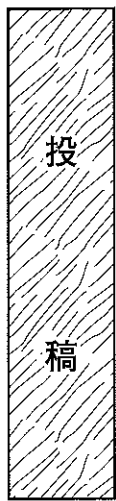
茶道の現況を見つめ直す契機とすべきだと述べられました。

また茶の湯文化学会の在るべき姿として、茶の湯の実践者と研究者が、乖離することなく協調し交流しながら茶の湯と向き合うことの意義を説かれ、地方例会の活動に期待を寄せて挨拶を締めくくられました。

Ⅵ 地方例会

このたびの茶の湯文化学会平成二十五年度総会・大会は、茶の湯文化学会役員・会員および金沢市立中村記念美術館の全面的な協力と、開催地金沢の金沢大学、金沢学院大学、北陸大学の三大学からの後援を得、金沢例会を運営する会員有志の協力によって開催されました。

なお、「研究発表」および「雑談」での各概要につきましては、「茶の湯文化学」または次号会報に掲載する予定です。



「秀吉名物「似たり茄子」茶入の成立と流転」

山下 桂憲子

天覧の榮に浴した「似たり茄子」

『山上宗二記』(宗二傳と評)は昭和五十五年(一九八〇)秋、東京国立博物館特別展「茶の美術」に出展され、同五十九年三月、「特別展図録 茶の美術」に全文の写真図版が掲載されて約三〇年が経過した。右『宗二記』

に「天下二四ノ茄子トハ是也」とあり略記すると、

- 紹鷗茄子 関白様二在、
- つくも茄子 惣見院殿御代ニ京本能寺ニ
- テ火二入失也、
- 珠光之小茄子 信長公御最後ノ時火二入
- 同失、

と記されている。このうち、小稿においては「似たり茄子」を主としてとりあげる。天正十三年(一五八五)ごろ、秀吉が友宗麟にあてた書状に、

其の方御所持候似たり茄子・新田肩衝  
両種のこと、宗易物語せしめ候条、所望  
の旨申す処、早速御入眼祝着に候、尚、  
宗易申すべく候。(天正十三年五月二十日書状)

とあり、同年五月、「似たり茄子」が届くと秀吉は早速、美術鑑賞に長じた津田宗及に鑑識させた。宗及の詳細な拜見記がある。同年十月、秀吉は禁中茶会に「似たり茄子」を玉座の御床にかざった。その後、大坂城大茶会・北野大茶湯ほか、主要茶会に用いたが惜しいことに大坂夏の陣に際し被災した。

織田有楽が語る「茄子」二つ、紹鷗・似(似)

大坂落城五カ月後の元和元年（一六一五）十月二十日、織田有楽は京都二条屋敷茶会に大徳寺の江月和尚ほか二人を招待した折、大坂落城に被災した多くの秀吉名物があったことを語った中に「似たり茄子」がある。江月和尚は「覚書」に次のように記している。

有楽物語、今度、於大坂滅タル道具、凡ソ数台二つ（中略）茄子二つ、紹鷗（似たり）、（種有湯茶會記）。

「於大坂滅タル道具」と記されるが、拾い上げられ修復された情報はまだ、有楽に伝わっていなかったらしい。淀殿の叔父、有楽は大坂城に参仕して秀頼を傳育していたが大坂役のころには京都に退いていた。ともあれ、この記録は大坂役に被災した茄子茶人は「似たり茄子」と「紹鷗茄子」の二点であることの確かな証左となる。

ちなみに、江月和尚は宗及の次男で春松・宗丸・宗玩と改称、寺入りして江月和尚となった。

天王寺屋（津田氏）の宗達・宗及および宗凡の歴代それぞれが記した茶会記、合計十六冊が茶器などと共に大徳寺龍光院の江月和尚の手許にもたらされたのは兄、宗凡の死後（種有七）であろう。江月和尚は十六冊を座右

あつたことを物語る。秀吉は「似たり茄子」を内赤盆・数の盆・彫盆・堆朱盆に据えて大切に扱った。

### 「付藻茄子」と誤称された「似たり茄子」

「似たり茄子」は大坂夏の陣に姿を隠してから、実に四〇〇年近くを経た。しかし『影印本 天王寺屋会記』（『茶道古典全集』七巻）の津田宗達・宗及父子の「つくも茄子」拜見記、江月和尚「覚書」、宗及の「似たり茄子」拜見記、そしてX線撮影によって静嘉堂の「付藻茄子」と称される茶人は、秀吉名物「似たり茄子」であることが再確認できた。正本『天王寺屋会記』刊行から五十年余（種有七）、影印本刊行からでも二十五年余（種有七）を経過した。

永島福太郎先生は『天王寺屋会記』解題に「この書は疑念その他の一掃に役立つであろう：茶説の是非鑑別の丈尺の役割をになうことになろう」「美術評論にすぐれた宗及の道具拜見記は貴重」と記しておられる。以前から疑問視されていた静嘉堂の「付藻茄子」は、『天王寺屋会記』によって「似たり茄子」であることが判明、まさしく「疑念の一掃に役立つ」つたのである。

静嘉堂は今年一月、静嘉堂文庫創設二二〇

に置いて大坂役のころを生き、大坂落城後、思うところあつて「宗及他会記」の末尾に「右之分頑父宗及覚也」と注記したあとに余白をとり、自身の覚書を記しはじめた。「有楽物語」である。これで『天王寺屋会記』は現状のように纏まった。元和元年（一六一五）のことである（種有七）。

### 「似たり茄子」のX線透過撮影結果

平成六年（一九九四）六月、静嘉堂の「付藻茄子」、実は「似たり茄子」のX線透過撮影を行った。「東京文化財研究所」刊行の冊子中に「個人の研究業績」という項があり、三浦定俊氏（所立文庫）「（解説）唐物茄子茶入「付藻茄子」松本茄子」X線透過撮影「伝えられた名宝美の継承展」静嘉堂文庫美術館編 PP.七〇〜一」と記載されている。静嘉堂の引用によると、「胴部は細かい陶片を多数継ぎ合わせての接合である。断面の一致する陶片が、水平に走る轆轤目も合わせて継がれ、各陶片のおおかたが本来の部位に、元どおり配置された様子がよくわかる」と評価されており、静嘉堂の「付藻茄子」と称する茶人は被災以前の形態に蘇っていることが判明した。

「付藻茄子」と称される写真図版（平成六年）

周年・美術館開館二〇周年記念展覧会を開催、所蔵する茶道具のうち、えりすぐりの名品約一〇〇点を公開したと報ぜられた。信長、秀吉、家康と天下人の手中を経た奇跡の逸品「付藻茄子」は大坂夏の陣で焼失したと思われたが漆繕いで今の姿に蘇ったという記事である（種有七）。同趣旨の発表は平成十六年（二〇〇四）九月の「茶の湯文化学会 東京例会」においても静嘉堂学芸員からあった。ところで、静嘉堂は津田宗及の信長名物「つくも茄子」拜見記について「：貴重な資料である。形にとどまらず、茶人の景色が詳らかにされている」ので静嘉堂の「付藻茄子」と比較し詳細に観察してみると「現在と異なる特徴も少なからず指摘できる：」（（原））というが、宗及拜見記は信長名物「つくも茄子」の拜見記であり、静嘉堂の「付藻茄子」と称される茶人は、秀吉名物「似たり茄子」であるから「異なる特徴も少なからず指摘できる」のは当然である。

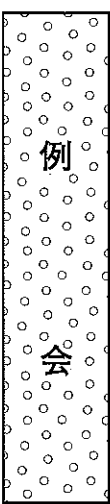
静嘉堂はこの度の記念展覧会においても秀吉名物「似たり茄子」を、信長名物「付藻茄子」と誤称して解説し、盆にも据えずに展観している。名物の成立と流転を思う。

（種有七）、実は「似たり茄子」の写真図版と、宗及の「似たり茄子」拜見記を比較すると、「紹鷗茄子」より丸目で大形であり、釉薬は華やかであること、姿形は富士茄子（五十年の歴史）の心（趣）があることなど（種有七）、宗及拜見記にすべて符合し、静嘉堂の「付藻茄子」と称される茶入は「似たり茄子」であることが確認できた。ちなみに、これらのことは拙稿「天正十三年禁中茶会の茶人（茄子二つ）」に詳記、「茶の湯文化学 十一号」に掲載された。

ところで、「松屋名物集」「宗悦」の項に「宗悦博多 茄子前羽淵」と見える。また、「仙茶集」川原紹悦の項に「似茄子、いま宗麟二有レ之」と見えるので（松屋名物集）、博多の宗悦は姓を川原といったらしい。そこで、「似たり茄子」の伝来は、

羽淵—川原宗悦—同宗作—同紹悦—大友宗麟—豊臣秀吉—同秀頼（大坂落城で被災）—（家康）—藤重藤厳—岩崎家—静嘉堂、となる（種有七）。

「似たり茄子」は天覧の榮に浴した輝かしい歴史がある。傷つき修復されてはいるが、その傷は大坂役に遭遇するという日本の歴史を背負うものであり、秀吉終生愛蔵の茶人である。



### 東京例会

（平成二十五年五月二十五日）

「張源『茶録』と日本 — 藤村庸軒と上田秋成」

岩間眞知子

明代茶書の白眉、張源『茶録』の訓詁・通釈を『茶の湯文化学』一八号に発表したが、その後に分かったこと、同書の内容から見えるてくる日中の茶観・茶文化の違いについて考察した。

張源『茶録』を収録する萬歴四一年（一六一三）刊の諭政『茶書』は、公文書館と国会図書館に所蔵され、同年の刊行でも両者は冊数も茶書等の順も異なっている。国会本は蔵書印から、旧蔵者が江戸後期の文人・田能村竹田と推察された。

張源『茶録』は中国では後世の茶書によく引用される。明の屠本峻『茗笈』と清の陸廷燦『続茶経』には、張源『茶録』の引用文とされ、諭政『茶書』にない文がある。「茶録序」を除いて、それらは許次紆『茶疏』の文と確認された。

日本では上田秋成が『清風瑣言』に二三か所引用する。しかし秋成は出典を毛文錫『茶譜』なども誤記する。その他の日本の煎茶書に直接の引用は見えない。一方、一六八四年刊の向井元升『庖厨備用倭名本草』巻一三は、「中郎先生茶譜」の題で張源『茶録』を収録し、巻一三の序は藤村庸軒が寄せている。漢籍に造詣があり、詩に陸羽や盧同の茶歌を引く庸軒だが、序文では日本の茶会が中国の茶を超える位位置付ける。

日中の茶観・茶文化の違いは、このようなところから見ると思われる。中国では茶書に、茶の製造・産地・茶器・飲み方などを記し、茶そのものを追及するが、日本では茶書に、茶会の道具・料理・参加者を記し、茶そのものより茶会を重視するのではなからうか。

今後も日中の対比から、茶文化を探ってみたい。

#### 「千利休切腹の史的検討」

中村修也

天正十九年二月二十九日に利休が切腹したと記す史料は、①「千利休由緒書」、②『多聞院日記』、③『北野社家日記』の三史料であるが、すべて信憑性に問題がある。『北野

題などに関する研究は程度の差こそあれ、いまだ十分ではない。この内、利休と禅についてはすでにこれまでも語られてきたところではあるが、利休と禅の関係も残された課題の一つである。

天正十三年（一五八五）一〇月、豊臣秀吉の禁中茶会に際し、古溪宗陳は利休号の下賜に対する偈頌を書き残している。その前文に「泉南之抛笠翁宗易 廻予三十年飽參之徒也 禪余以茶事為務 頃辱特降 綸命 賜利休居士之号」「利休居士号頌」裏千家藏「蒲庵稿」所収」とあるが、「予三十年飽參之徒也」部分については、これまでさほど重視されてこなかったようだ。おそらく盛挙の祝儀に対する偈頌であるが故に、必ずしも事実とすることとは難しいとされたのであろう。

ただ、この部分を文字通りに受け止めること、利休は予すなわち古溪宗陳に参禅すること三〇年となる。利休が「宗易」の法諱を名乗るのは遅くとも天文一三年（一五四四）の茶会以前であるから、以降、参禅を続けていたとすれば四〇年以上になる。現段階では、この内、の三〇年を古溪に参禅していたことを示す確実な史料を見出すことは難しいもの、利休と古溪との関係は最晩年まで続いて

『社家日記』は、リアルタイムに京都在住者によつて記されているが、実見した記録とは考えられない。利休成敗、首と木像の磔を記すが、それほどの大事件をどの公家も日記に記していないからである。

『時慶記』同年二月二十五日条には、「宗益曲事之由、先日披露候、遂電候処、又今日於一条橋、彼木像ヲハツ付ニ被懸候、不思議ノ事也」とあり、『晴豊記』には、同月二十六日条に、「宗湯、利休事也、曲事有之よりちくてん、（中略）その木さう、しゆらくの橋の下、はた物ニあけられ」とある。両書ともに、利休逐電の情報を記し、利休木像が磔にされたことを記すのみである。さらに『晴豊記』同月二十七日には「利休事もまたのミ也」と記されており、利休問題は文書による裁決だけで済まされたと読める。

他方、伊達政宗に随従して京都にいた鈴木新兵衛が国元の石母田氏に宛てた手紙に、「宗易、其身之形を木像ニ作立、紫野大徳寺ニ被納候ヲ、殿下様召被召上、聚楽之大門もどり橋と申所ニ、張付ニかけさせられ候、木像之ハリ付、誠々前代未聞之由」とある。これは、実際に新兵衛が見聞した一次史料で、最も信憑性が高い。

いる。古溪との関係を中心にして、改めて利休と禅を見直す必要がある。

「ポストン美術館にみる岡倉覚三（天心）残像——二〇一一年春の「茶道具展」展示をもとに——」

大和田範子

本論の調査の目的は、一〇〇年前の岡倉覚三の残像捉えるために、二〇一一年春にポストン美術館日本部門が開催した「茶道具展」をもとに明らかにすることである。方法として、ポストン美術館日本部が行った「茶道具展」、特別展「フレッシュ・インク」の比較調査から始めた。

岡倉覚三がアメリカマサチューセッツ州にあるポストン美術館東洋部で顧問として日本美術コレクションの鑑定、修理、管理を始めたのは一九〇四年の日露戦争開戦の直後であり、五年後、現在のハンティントンに新築移転した時に、彼は設計から東洋部の内装に参加を許され、法隆寺の内装をそのまま表現して空間を含めた展示場に仏像を安置するといふ斬新な展示を行った。この岡倉の展示に対して二〇一一年の「茶道具展」展示を比較すると、展示目的として提示された「侘び空間」

本来、追放そのものが処罰で、謝罪を待つならば、聚楽屋敷に利休を謹慎させるべきで、逃亡も防げる。また、本人の公開処刑に意味があるのに木像を磔にしたのは、本人の死体がないからと考えられる。三斎が淀津に利休を見送れたのは、秀吉が利休処分を決断する場において、いち早く行動がとれたことを意味する。とすると、利休助命に三斎が関与したことを推測させる。

また、利休死後の文禄元年（一五九二）五月六日付秀吉書状に、「きのふりきう（利休）の茶にて御せん（膳）もあかり」と書き送ったのは、書き損じではなく、利休が存命していると考えれば納得できる。

#### 近畿例会

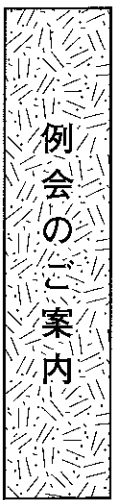
（平成二十五年七月六日）

#### 「利休研究の現状」

谷端昭夫

千利休に関する研究は一時に比べて停滞しているように見える。すでにある程度の利休像が描かれているからであろう。ただ、残されている課題も多い。たとえば利休の茶系や茶の問題、特に点茶法を含んだ茶会の性格や茶の思想、さらに家業、自刃を取り巻く諸問

が展示空間に再現されないまま道具類の展示が行われ、光・空間・音などといった日本らしさを取り込んだ展示表現もなく、「茶道具展」展示から岡倉覚三の残像を捉えることは難しかった。一方特別展「フレッシュ・インク」では、岡倉が蒐集した一二世紀の中国絵巻を現代の中国画家がアレンジし、今の「中国」を展示に反映し、展示空間に岡倉の残像を残していた。このような異文化主張はグローバル化が進む現代、国の独自性を主張するという意味において岡倉時代以上に求められている。今回の調査から、岡倉覚三の仏像展示は、現代にも通じる日本主張であり、ポストン美術館日本部はもう一度岡倉覚三（天心）に戻るべきではないだろうか、との結論に至った。



#### 例会のご案内

#### 東京例会

十一月十六日（土）（会場：東洋英和女学院

大学六本木校舎 午後二時～）

「永青文庫資料から見える細川三斎」

三宅 秀和

「羽箒について——鳥種と茶人の好み」

下坂 玉起

一月二十五日(土) (会場・五島美術館)

午後二時

「江戸時代初期における茶陶の在り方について―光悦を中心に」 砂澤 祐子

「名物記と絵画(仮)」 鈴木しおり

静岡例会

十月五日(土) (会場・静岡産業大学)

藤枝市 午後二時

「中国のお茶文化」

お茶を売る(茶ブランド構築) 顧文

お茶を買う(中国の巨大茶市場) 王亜雷

お茶を飲む(生活の中のお茶)

顧文・王亜雷・小泊重洋

東海例会

十一月十六日(土) (会場・名古屋文化)

短期大学 午後二時

「千少庵の妻女について」 山田 哲也

近畿例会

十二月十四日(土) (会場・同志社大学)

至誠館(予定) 午後二時

「近世後期の茶道家元の下向と地方の門人

の上洛―山陽道を中心に―」

「茶会と雪舟作品」

(会場については決まり次第、ホームページにてお知らせいたします)

井上 秀二 影山 純夫

北陸例会

三月八日(土)

「未定」

未定

金沢例会

十一月二十四日(日) (会場・石川県文教)

会館会議室 午前九時半

「茶の湯歳時記・日本の四季」 小市 敬子

「茶の湯釜」

宮崎 寒雄

高知例会

十二月八日(日) (会場・高知県立文学館)

慶雲庵茶室 十時~十二時

「茶の湯関係文献を読み所感と発表」

柏井 武 永吉溪滋 今井浩嗣

文献名 日本の極小空間の謎「藤森照信の

茶室学」(藤森照信著)

「古伝書にみる茶の湯の心と姿」

「茶の湯といけばなの歴史・日本の生活文化」

(熊倉功夫著)

茶事

席主 四名(十二時~十六時)

場所 高知県立文学館 慶雲庵茶室

会費 五千円 参加希望者は予め連絡を

して下さい

二月九日(日) (会場・高知県立文学館)

慶雲庵茶室 十時

「石州流三百ヶ条不白答(下) 常用文」

「これからの茶の湯」

発表者 柏井 武



新刊紹介

\* 『戦国武将と茶の湯』 桑田忠親著 小和田

哲男監修 宮帯出版社(定価一、八九〇円

税込) 本書は、写真・図版約一〇〇点を掲

載し、「茶人にあらずんば戦国武将にあら

ず」と戦国武将と茶の湯の関係を説いた書。

\* 年会費を未納の方は、同封しました払い込み用紙にて至急お払い込みくださいますようお願いいたします。